

凡訓

奔多綱

9
1147
50



川柳宗匠撰

柳多留

東都市谷書肆奎文閣

真跡吉例水滸傳會 雀主三箱



川柳 免の世子行して八豪傑比土なるむ
 起り一切は遊伎をほす先キとさ新さるハ
 正一ふとに去砂の三箱子ハ道子忠義
 不かく七案も例乃水滸傳比今と備し
 同盟の勺と集△是ふつさくて加乃
 一百田乃如く全ふセハ羅氏三代乃唾子也
 群也いしほさり即小と夢て予佐安小あし思

元保三辰歳初冬

二代目松歌



1147
50

兼題草木虫

百三篇

如雪評

味ひよ孝乃竹の子義の歎 加夫

喘まけて人と即ち孝乃能 全

寿々乃永く先たハ蝶の爰 醜郎

峰て義乃虫乃とゆも合 三楠

心よく痛むハ虫等のこい猶徳 三朝

七粒の芳妻子似虫とくくあさ 裏成

風し此香に薫乃信く木紙山 反和

時あ虫蝶乃啼かス蝶の枕 醜郎

梅不しと對映子しと蝶の爪 種蒔

糸之虫益々と糸入る院作君 古棟

三階くくえくあくく年く夏の花 通雅

擔りもよく季和子咲く如麻花 全

初言に白髪やしと此翁の杖 三朝

志あり乳のやうに鬼打指で透 花山

むき妻産戸と籠の乳乃やう 花菱

吸口子入る若翁とせうとまをれ 花菱

ありて今生してやまらちくい虫
 三箱
 馬了日日月にあらねる。妙那冠
 海魚
 日らりり乃降子に比のまを被
 裏成
 千早振出觸う出くと虫仲る
 種蒔
 地くもあめく人のやめよ天衆
 龜丸
 ありと世の幽霊柳と尋てく
 今
 け所小使たは色物 雲乃峰
 百毒
 益唐乃面うと皆付て地つるみ
 醜郎

高麗評

教感に成て買加たの 権の魚
 喜標
 日を除く松も六位うおとらり
 入心
 下教にも掃く人六辨を忠
 三箱
 一牧ハ焼杖とあり復るう
 三朝
 教え世よ城垣親子持指とのし
 如雲
 床の梅花てや之のほく一琴
 玉守
 彩分限是えそ名の松のまを
 推竜
 抱くれても梅子をい壳の子
 通推
 庭乃松心乃繪糸に高て買
 如扇

集を記れし一書も思はる時

醜耶

花宮うら平川一箇不評の極

今

花乃江戸端子錦の冬牡丹

海魚

賣君よ虫の毒射と木傷の紫

入之

舟虫乃をやーらふちい虫

百之部

虫毒射キ妙身の面八百まおと

真寄

木花乃傷とい従乃大 纏

百成

おんまやくに風陽丸と老う遠の

亀丸

ホイくいと云へも七ヨリく書ハ近

通古

祝風止し小波の散をど 五葉

真寄

七葉よそれうまくと孝を起

今

柳泉加評

仇を思ふ物人にも梅白ひ

文和

脚言あふ基盤のうへに梅の首

推竜

邪は乃を蛇ていせり如哭の玉

八位

梅と橋花車 再乃取入梅

花菱

吾の柳魚谷 灰炭の中下刻

玉守

玉百合乃花うぬ衣の志同も口

三箱

齋菜を齋木ハ化さし能光リ	推竜
投入乃花子花ハ除夜の至	百之蒜
梅子と對能よまゝ嫁の風	種時
虫盡のうけ入依破の飯ッ粒	玉守
錦木て娘と泣き料配人	花菱
虫目鏡のうら風乃首湯山	通古
庭乃松心の鈴音よらて冥	如扇
木の枝乃紙屑初初不花の夜後	三箱
小人傳系此ハ落たやまを能	入立
蜜うと思へて鳥猫子	三箱
小豆公家 葛ハ平人 草ハ匠者	推竜
貪之な極木を能ハ能ウ脊負	十九丸
更中へ下しつて了る花乃多	高麗
おれり及乃機ハ味いと能 曰	文和
門松たちをち一年此之ツ子サ	三朝
杖苗と持葉如天物娘子行	種時
孫を解ても流しだじ花の白	如扇
二階うろろおては後乃花	通雅

物乃單と名ふるよと元一十社礼
如翠

鮫ヶ坂川茶のぼに信し唄の世
古棟

刺床てかむむしときる木葉を
文和

目たう身たり木魚八面おひ
十九九

不魚存赤面お勤よ百足う出
喜棟

川越ハ橋のつむ姿あり
醜魚

羽虫紐抱めてさるお天物
文和

杖の系へ柳みたる小便不
麻橋

か先くしと思や夜迄の近たは
通人

筆先と口こへと子てりき也
玉守

重年とよく酒あてる君は
魂師

天人の夢られ天物の刺と押
程高

小便乃雨雲尚とあり也
十九九

文和評

他物乃内て稲穂八月美人
友和

若紫して書巻と整の書巻卷
山

花の夜宴子ちる櫻川
如存

燈の江戸突にも櫻花の車馬世
兼毫

凡人乃口てこりふぬ 三盃破
人々義之飛ハ橋の如破山 三捕
無不々留ハ後去の肝と抜 今
親舟と帰す元々夜長の袖浦 南風
名尚りもつた里と帰る 飛舟持
作ら飛ら捨子にちる里橋竹 菊水
信悠々喰と及び迄る 雜考著 醜節
病されて中と解てる 飯一亀 崇川
七生物云のてんわも集に入 三菊

鳥考も橋子一後放生今 通推
免書て獲らるるあつ了 劍証切 加丈
木弓よのちかくや目あつの 銘子挽 八窓
梅子と對紙よきる 娘乃瓦 種時
茅双紙買て多く けつまつき 三箱
橋紙一の松亡八を乃 庭乃云 玉守
虫の根と切る 鬼打の五宝丹 三箱
霜王樹ハ子仇とらん 亦肩車 醜節
葉ニツ 龜コツコと して 兜り 推竟

二朱乃於座に日塔の骸鬼つきた 玉守

虫賣ハ星田乃彼と折て以り 撞時

當うと思へたかき猫子鈴 三箱

炭と喰う虫子夢物赤巻子 友和

魂イテ垢削と浮く小侍 通雅

蛙くもお免をのせぬ瓦天窓 亀丸

瓜と先と付て足袋をハたゝ虫 百々爺

いもむらゝ挟て拾ふたまご虫 三朝

狂口二の虫の居所乃獲将人 百々爺

木に成てとつゝおぢおぢの女子 十九丸

大尾 乙女乃月後煙ハ食もたき 種時

相評勝負

立評 梁山伯首長 四代目 川柳

呼保義宋江

三百二十点 玉麒麟 蘆俊義 マサコ 二箱

二百八十点 智多星 吳用 〃 百成

二百五十点 入雲龍 公孫勝 〃 通古

二百五十点 小旋風 柴進 マノヒキ 亀丸

二百三十、狗子頭林仲
マサコ 海魚

二百二十、太刀 関勝
又七キ 十九丸

二百一十、双朝將呼延灼
ヤキ 加文

二百十五、霹靂火秦明
" 三朝

二百十、双鎗將董平
マサコ 夷成

百九十五、行者武松
マサコ 種時

百九十、小李廣花榮
" 通雅

百九十、花和尚魯智深
" 百三命

百八十五、没羽箭張清
サウキ 水甲

百八十五、黑旋風李逵
マサコ 三箱

百八十五、九紋龍史進
スヒキ 如扇

百七十五、青面獸楊志
マサコ 通人

百六十五、神行大保戴宗
ヨロウ 醜廓

百六十五、混江李俊
マサコ 友和

百五十五、浪裡白跳張順
" 真寄

百五十五、浪子燕青
" 三箱

百五十五、義鬚公朱仝
" 古柙

百四十五	揜翅雷橫	マサコ	撞時
百四十一	赤髮鬼劉唐	ヨウゴ	醜郎
百三十五	病闌索揚雄	マサコ	通雅
百三十五	息先鋒索起	〃	百成
百三十五	金鎗平徐宰	ヨウゴ	文扣
百三十五	捨命三良石秀	マサコ	拍丸
百三十一	沒遮欄穆弘	又ヒキ	推竟
百三十一	兩頭蛇解珍	マサコ	通古
百三十一	双尾蝎解空	〃	通雅

百三十一	船火兒張橫	マサコ	玉守
百二十五	撲天鵬李應	〃	通雅
百二十五	立地太歲阮小二	又ヒキ	山車
百二十五	縵命三良阮小五	マサコ	三朝
百二十五	活閻羅阮小七	〃	三輔

以上

之集

凡とアト

力増たり

川柳

天保四癸巳歲 正月二十六日 真砂初初き 櫻川樓上額面

催主三箱

花菱改
木印評

盛古曲水とあるさき川	控為
小来橋も茨子能乃花近官	稻丸
塗たて乃登へし考の小手返	一碎
橋川心のお子乃立場あり	三箱
梅う香にぬつとや此物茶居式	全

方ちにも荒神さゝぬと橋向小
近斐

妻乃吸物不川子 佃し白
醜郎

元日とと差と幕巾に用ハ家
近雅

居濱乃追人松井のあゑ近
如府

兄無く上総戸建る袖ヶ浦
高家

うらハ何上総本條の袖ヶ浦
十九九

炭賣乃井を節りく思くあり
彦人

智恵の掃乃中にあくる牛車
稲丸

日赤乃怪物と初てる居ハ
長成

此亭皇の酒乃余りとう初まき
海魚

玉ニ引あてて元るを目鏡
三浦

礼帳乃中に凡雅か女の子
廿山

裁糸ハを本も云イ 長局
角丸

おツカアの草履毎晩千ヤシを
海魚

伴勢乃為ちる男品経さき
三箱

推龍評

幾千代も朽虫ハ松の湯代と落
近斐

特長よ千歳と包ハ小松系
三箱

けいさこの智恵て保氏乃代子返	角北
凡そもそねく〜兄了四日の夜	木卯
舟車祝此股へ出馬す 不	柳舟
船解てあつても名無耳の垢	画右
ひうし〜あつて花給の全屍凡	右柳
花乃王急乃既子送り号	指丸
河破と八名の上之花乃山橋	三捕
後正り蛇ッの廣イウ甚懸と出	百毒
目とに名る馬に命乃針はり	花山
捨子も此よ合ぬのう發子され	全
高輪と弓張月乃〜秋の節	百毒
世ると膝く凡の灯と蛇〜	廿山
鳥一細脊文てある少弓物公	右柳
氏土乃乃猛子〜も〜唄の曲	玉舟
口車多乃乃揮〜元〜針手筆を	十九丸
合解てあされや書文と也野馬	古柳
名にく〜以〜名乃後には用り	裏城
懐も〜計けち子船〜	玉舟

日と春と月と流るゝ美の写
祐とく乃に字辨是と対たり
田舎多月心出へをよるつて
各書中ハハハ以世借り身以去る
梅ヶ枝乃後子後内の秋後
友和
吾人
哀成
如夫
木卯

通推評

和歌に寿と去るハ題後三年
紫乃乃子徳也乃り思能乃地
若象一々喜徳と望る香爐塔
尺杖も物之如先乃後乃為
花山
聖節
山

碎光の夜に飛の二月 費
潤への祿捨る吾書乃阿身鏡
匠是く乃夜ハ手托也思初
百取ハ愛もたも兄也孟学若
多全乃穢笑情の手くく人
目強くそ手の唱る又ハ舞ハ賣
仕舞札取乃集るのど松の内
吾あ心元うむさんそ初の梅
稻丸
八松
稻丸
玉守
南風
廿山
玉守
吾本

芝浦子袖原川子復と無	廿山
丹六て餅へ灸とからる	玉守
糸の糸と囃をうら復と味イ糸	栄川
たまさきて咲い糸花室乃花	四島
玉帳乃黒白糸乃評判記	玉守
老紙乃長イハ足乃老イ糸	地蔵
引ヶ返の糸下羊の岨の糸	龜右
伯夷の地原日坂乃餅の糸	三箱
<small>大尾</small> 他地乃中て指徳ハ目斐之	友和
花の江戸糸ふハ口に横川	十九廿
形記乃衣に光次縹て出た	三捕
一字ても藤雲の糸イ飯糸手巾	志家
六日にを死儀とえ(了)五百坪	文和
山口乃みお(ハ)公表の糸(了)物	龜右
予後ハ神糸も(了)に初日の出	三箱
如髪に糸のたるハ髪母年一府	指丸
口糸乃(了)丸の(了)娘乃靴着者	全

かゝるかと信マれをわしぬる地は 玉守

元日ハ爰と幕に用ハ世一 通雅

佛之牙灰指金使去のろと配 三箱

垢世事にマと秋の田前油一 今

若子能く候々候乃實 舟 魂帛

持世衣にも出依よも出世仲の丁 今

元朝乃鳥鶴よも増る夢 友和

七人々猫の死てつる菊乃虎 廿山

和歌集言製するをそに海晏寺 本所

宇治の夜言候畫てつる下ちと 三捕

あつと有る古候繪の金厚凡 古柳

鏡日記袖うら筆とるをト先 芝加

り遠く器もおろもさるる川 栄川

盃も曲水とあふさるる川 控所

櫻門よと文哉よ流ひの能 角丸

紅く森采一二日にをる實舟 裏成

必ニツ引多てるるを自鏡 三捕

晴天よ指事の切る西の才 廿山

牛乳をハ武彦と仕切る水戸の珠	高藤
朝小成て初舎乃噴の如くさ	和必
小を後菊も母の尻尻痛	文和
蓮乃毫象ハに仮名のイの字	稻丸
梅に一燈菊終乃海り花	由愛
帯乃友波よ色の糸でね以	三箱
糸髪と髪あやうらてと比べせを	文和
出来たてハ及人の多イ別物能	魂郎
最桶子汲きハ飯乃糠ふくふ	八草
盲女に子と行うはて渡る生田川	通石
借りて来ててうおくと娘持南	魂郎
弟元た子女名ハ梅松葉松さうく	飛竜
梅葉に仮り乃舎りのむし蝶	如孫
ヤイ悴夜ももえをるは海屋ち	三浦
生碑の柱ハ毒脚ら葉屋光一	如孫
さそく乃妻りさ松枝一純の草	木卯
たましく仕おと川たくるあや何帯	通石

海嶽自たくつて並て是どらと
入竈 文和
所乞と男日照乃女僕傳
入竈 文和
實舟たんく波うらうく前
海魚 文和
利刀と槍鈴八尾て水と吞
文和 文和
海ぬのハ英女臨くのハ英男之
山

番外

道乃砂利茶研のやりに車はを
海魚 文和
葉籠うにま物たて 替ら色
文和 文和
片麻此の物松木うか史著
松分
徳と物をとえよまき料花美
松分
石碑走母次帯し破と書僕
近賢
妻南可まけ子曲 秋田乃
二和
是も源糸の疾りに橋川
通雅
鳥下細谷負て赤い少多物金
古柳
大木戸ハ江戸乃脊筋のちうけ元
高志
松か巻るとさむいも百下り
十九和
かとうの出獨よちて来い蛇の目傘
古柳
お遠いぶる自筆の状 心
裏成

子の幼くへきての字ハ口て云
 通古
 舟舟乃白灰て候も白髪松
 木卯
 笑と後不返居ハ返去の伏知尺
 龜也
 居ハ口アアめとおもへとも
 魂仰
 ちツわけか松ツふくまど候を
 芝加
 老乃釣魚流し々々松川
 廿山
 口て飯喰ふハ吐茶傳新師
 三捕
 多捕ハ口張月々秋乃候
 百糸

天保四^{己未}年
 二月二十八日
 御穂
 鹿嶋
 西社
 頌而

雀主三箱

舟橋評

要石ももんだは子稚子ハ啼
 百歳
 多傳乃硯湖水のふて出朱
 近賢
 波乃中鳥居と建了取登屋
 醜郎
 石暮乃松東海へ香と死リ
 三箱
 徳利乃中て浪打高田川
 芝加
 千本古一夜小芝へ松の魚
 海魚

あまへ法玉と振く舞止ん	三箱
目にも御独見は無情の二柱	花山
瓢箪の爰よを忍ぶ縁の子	木甲
病付きの島子に夜具を忍ぶ	近賀
水香う来て満月と切り散る	角丸
小弓物を忍ぶ夜女度と忍ぶつゝ	裏成
已う罪已しと妻る見徳玉	三橋
おとぬくも天物とある八柱兼金	友和
泥水子位を云兼もにりん屯	芝加
出舟滝丁て音玉ハ土子と葉	栄川
神祇ハトシカツナリて宮巡り	柳水
盃は挿棧のあつゝ花乃山	芝加
踊つてハおかしきまゝと觸歩り	山
おしけと是思場亦の袖は梅	醜郎
思たかみちおかしとたんと海は沙路	裏成
無心女賢毫にして兄舞お	柳水
芝乃浪音の送子味ひ歩り	近賀
紙ハ上田う降葉ハ下女出合	醜郎

か余龍の初る茶維馬よ衆り
揃テよハ十トけんむきか音業居
耳子階付て形のハ魚同か
てん登んうをけて維子一止業
亡盲維々勢宮乃揃テ人
鹿^{大尾}鳥乃係者扇橋う要人
木甲

全

通人

真寄

三橋

種時

十九誓評

農民の子に夏か来来りか来
芝加

芝乃を手突松古青胸維
海魚

林代よもたまてハ酒と女
文和

孫よちりさきまを牛身ハ揚枝め
通雅

への字ニ字利刀若の心乃提
三箱

振うに成り秘法代を群人
海魚

鶴て始飛くかめり乃香後
通人

師乃恩く重くて作き菟をり
夏成

揃ッたも物に由るハニメ姑
芝加

春と其十彩店ハ公衆と民衆
全

抄録の限有寸戸の呈とあり
稲丸

モ入り 痛し 係係もつじ 勤の才 近賀

耳あはれと元と長飛ハ義と後以 三朝

因て老ハ玉子 餘糸のトツケイコ 通人

凡品妻乃 信目一十女ハ 喰ふハ 文和

切やうたんの 妻におむる 翁の子 木市

糸徳 扱とわけて 床を 糸の子 山

ゆらゆらんと 一 罽毘 くらたうと 三箱

お糸りと せめて どんな 車丸 扱 三橋

かまきり して して ころこの 心糸 ぬく 花山

大まきり 痔 扱 牛 身と 焼て 対 種蒔

紙玉と せめて 鉄炮 兄世と 張り 竹丸

口 指 活たら ち ち 大木と 成り 痔 扱 玉 海魚

お糸と せめて 尻と 扱 上る 下女 者 近賀

大尾 廣 糸と せめて 乳 母 扱 馬 百々命

友和評

有難サ 痔 扱ハ 乳 扱ハ 痔 扱 号 推竜

乳 扱ハ 芝 扱ハ 号 押 送リ 山

扱 と 扱 料 して 咲く 仲 々 町 高麗

似蝶と云雀ハ空て啼て海魚

阿比良乃吹と浮世の別世界 栄川

時多終母と知て啼且かき 指丸

物餅て高上りきると後、計 芝加

虫仲りるるん〜 手の傳止觸 海魚

抽ハ九年て終を指よやうと成り 三箱

虫てまゝ身賣ハ終て啼てい、 全

とん〜寺茶研う空に化て飛、 海魚

四ッ谷ては〜めでたきふた時馬、那々 芝加

為て来てまゝ手計る旅乃魚 和国

芝乃眞産既も細子引 近賀

報魚場たけ大キ字ふハ世イ不 栄川

下絶乃りある以も親乃る為と成 真寄

乃男と亭えいん不んたんで吞 百々傘

紙和ハかく是津控まかある〜 竹丸

賣夢も四才〜さうめ〜 芝音 三箱

要石ゆんたれ子雛子ハ啼 百成

本寺ゆ大里傘とむらひ等 通人

脛尻と他人の子をうばかしの女の
大徳のの小僧の鼻たらして
袖乃梅菽堂ハ香も初るに
伊行乃乃渡つハ船とホホ
裏成
種蒔
芝加
海魚

推龍評

未廣ハ五羊と尾の身ハ紙
目本乃土ハ踏セぬ 和歌比神
我徒の人々一竹葉ハ末世
海山乃恩の四民乃肉と成
師の恩ハ重くて修き美をり
裏成

神代子もたまそハ酒と女あり
近水の土地乃免忙ハ印ハ尼を
祀の梅菽堂ハ香も初るに
切株に孫亮乃物々麻号松
三味線の志分れハ付ハ薩のうさ
麻治浦化々末舟の粒多尼へ
三曲ハ抱て麻うしハ横子摺
唇ハ城リし鳥ハふへて玉ハリ
文和
花童
芝加
加夫
通雅
佃リ
近賀
文和

先七縁綱乃仕切よ夫後
 初茶婉う反甫乃馬瓜
 祝指ときう怒う流衣存女之
 女後伊勢殿乃馬子女舞一さ
 氏神よ流められたと青い喰
 鶴口と鈴て氏子の籠と為
 糸匠とさき禪とまゝ此糸祝
 女大神々々伊勢技と百く後
 種蒔 友和 榊水 百之糸 醜郎 海魚 今 古榊

細り評

有那と伊徳ハ仇元ぬ此神号
 海山乃園ハ田民の肉とあり
 神鏡子向ふ心ハ曇リ世一
 芝乃町階と海とに伊徳と遷
 繁昌サ一ト本房とてもか一
 卯乃花の垣指ハ夏の運入口
 彩采乃礼に小長と替て上
 神糸の綱お玉飾り乃尚り物
 於魯に芝かくれり押送り
 推竜 種蒔 宋川 海魚 近賀 古榊 撞時 裏成 山

妻乃海君子乃賤ハ家らうな	入窓
画心う有て初まるとる漢の友	全
雲雨に碓石乃かきく拙者	指月
是も縁綱乃仕切子夷紙	撞時
身多ふと兄山て張飛兼と造	三朝
濱もくう風乃絲のうあう夢	入窓
芝浦へ法惚て奇せ来る青舟	推竜
初乃牒牙狭子亮社に振うれ	指丸
也子昏り眼もさう苦もさう八兼	三箱
身に一度目と密といふ兄目定	百々爺
唇ハ城ノ乙名ハあて玉へけり	文和
高考乃硯湖水の玉て出木	近賀
紫衣の才て情云ハ海苔も菊の枝	醜郎
兼信子石指も来る漢社	百々爺
初手剣さるり初りつふ魚と久	今
花の山雲子と鏡もさるる飛炭	撞時
弁の刻ぬハ星とある初屋の帳	指丸
南大匠振と門も初手ハ晒落	醜郎

花吹雪生碎情小 所 まで 今

廣一世も己う心てせましくあり 榮川

りやまゝに己う方に立元のそれ夫 和国

ゆりく〜夢て嬉〜やゝ魚問を 廿山

てらるんうたて 籠よ下 出崇 三橋

藝て来て走事却る 旅の魚 和国

乃手乃むむに 摘竹賣付る 加太

及吐と踏〜 弁交ハ行り上 舟橋

玉泉光斗リニ味像子ハ合に 通人

地可危多引とまゝ 通 帆 海魚

木琴の籠なる是者て 藤老来ら 柳水

た〜の色て志烈く〜 死る者乃竹 友和

雜魚場たけ大さかたけハ世イ 瓜 榮川

賣賣し四方へささめく 芝 香 三箱

角力音業愛想とハかアる不と 今

人知れ花盗人せ 疎う退の 友和

大一龍正爪伴の 方々持て 醜魚

水音初やリと表の 獲〜〜 百成

お飾をれ押レる獲て山葵ツン
友和 百之命
おゆりぬ時ハ牡丹色も獲多きけ
井戸弱乃茶碗のふかへ娘群
水 柳水
以テ持捲乃たうさきに見へ
近賀
籠乃尾の穿世界乃種と成
三箱

川柳評

裏表テ世ノハ種鏡不ニ乃山
友和
弁乃花乃地根ハ世の運入口
古柳
芝の鐘徳玉乃舟の飯時斗
指丸

まきこり天地のいぬ 栗石 百威
栗石のんくは子孫子ハ啼 全
世と於一乃に七法衣の色好 高麗
李伯の庵へ四日月に栴尾来り 三箱
兄弟へ首乃切もせ二枚多 花山
秋桃ハやう振袖の赤十月 全
妻乃海君子乃獲、寒らうな 入位
智仁勇先狗中乃三盃那 推竜
水と粘箱と籠として江戸へ 三箱

洲夷引壘に雨申比花と歌

醜靡

夏雨小礎石乃かろく松の者

指月

沐生にハ友房桃乃洲拖洗

花山

唐乃雙並親子女双子坊主

佃リ

湯花神子持破走ハ桂川

廿山

麻付レぬおと葵花と浪の者

撞葺

神主ハ振たつて各錫の神酒

推竟

養生に斗り芝ツ子刺と喰

三箱

柏子能く打て廻ス金箔を

海魚

きこさらん竹をと味よおし

三橋

席考之各段音よ石 舞

撞葺

香をよたよをよとく 舞と喰

榮川

持たろ江戸小判のあつとわろ喰

舟橋

雲乃朝松と茶屋のわ舞

海魚

香を乃猫判人乃死て道

撞葺

石地花虫と化ス夜子の者

友和

足考とつて田圃ハ尸と建

和国

首かてて袋入よまきハ徳利

文和

馬喰下泊る徳必乃り驚き馬	百命
恙て元やと母の口より白髪生	醜郎
紙屑拾ひ於て竹の風の統	海魚
退屈よ衆相と実技手長持	全
此面白といふ身てあがり橋を走	十九丸
枕紙ても切みはらふ西	佃り
爪兵交乃り指目へ下女ハ喰ふい	文和
面目も肉を喰ふ先キへ是	推竟
下馬ハ殺来してして利と喰ふい	古柳
賣多も四才へさうやく是者	三箱
をり世々喰はるは冷飯と悲	友和
山七一の虎寐ほけておろかアヤ	十九丸
彩世帯あまうまにありんた	高麗
下女ハ鼻に分別ある是とあろ	全
何よ付彼よつげおまな勝の宛	通人
不男の痔持コイツハ親もせう	文和
持つと手と入して是齋の水と揚	海魚
むゆい時ハ牡丹餅も扱ふとい	友和

ふんとして接とをてるとを紙錢
灰へよく抄書ハ万文への色乃能
大腕乃花ハ七と無筆乃神の如
和国

袖

御度為發打浪の玉帯
催主 三箱

先おとたる柳を流す神魚
九評 佃リ

作き元小神乃惠と此字し
四代目 川柳

酉正月廿三日
武藏野月並樂志樂評

武乃業勤う忍水代と持され 麴丸
風趣へ鶴の奏関 誓司 芋洗
志帆片帆を紙よ鹿公和方の浦 樂笑
浦あり弓ひる汝ハ清なる勢 集馬
折焚は案入たるとせぬを言 コセイ
清衣運の妙多く石も目より成 勝見
鐵死くても名ひるびぬ首陽山 巨眼
志くぬ火を丁ぬ濡れ衣の成 後 樂笑

かりぬよみ糸をほむむ小松糸 砂
 力の引どり鹿甲で綴り結丸 小丸
 目をとむく花を結ぶ糸のま 礫川
 目まきまき名も冒くま下障の中 桑笑
 卧膝ありと東南の風も吹キ 風松
 合紙よ句の反舌交る鹿のまき 佃
 ちる花と草でたをむる勝角力 杜蝶
 やまて女房たままるる外落し 木賀
 屏のぬくも知らるる心で押さる 宿人
 孝母の徳利は鹿よたのりと原 壽鶴
 同さるるがたまる名そのキ学者心 品能
 ぬて人女もまてよ味辨をほむと不 佃
 医者も古白と定通よ化てり 木卯
 安スからぬ返くよ米の事 勝見
 うろくして人集をまをる玉さる丸 礫川
 猿と鹿渡るぬ先と鹿をい 芝鶴
 おまてひがゆさる鹿を 還席之
 かぶらりよ天物穴が二ツ入り



二の勝と云んで此邊の少きと云
賢業をあめて神農はのちや
かけておそむ女にふとひく
松井と先づおつきて七五三うける
木賀 解安 礫川 里長

市川三升評

日の初々鳴と老々人市代孫 木賀
三はの胡口号もまか出吾例 樂笑
焚火より実々又よ出る之々庄 菅子
同慶の時も和光の玉付島 早川

沈奥る振舞夜食後と和光来 定丸
時世くと落ぶれて道 奥方 春喜
形も有ありやとす田の投廻ぶる 株木
ふてんと木爪うて女子さー 水奥
穀刈と道よのまねる女 猿 佃
赤繩の端のようさうさう 娘
松葉蘭卜女松葉と情と法 巨眼
中くよるきおともえのづ 馬石
居ぎるるれ毛よ陰を括く実あさり 木賀

麤の鼻息うらまゐたのやうな 出ル 綾丸
波ハ波連ヒツのやうなり 有
急激突^{ツッ}突^{セン}射^ツつらつら^ツの^ツ星^ツ屋^ツ
書信の義理外^トの^ツ尻^ツは^ツ紙^ツを^ツ
さうま^ツ芋^ツ後^ツへ^ツ包^ツふ^ツ角^ツ力^ツ取^ツり
髪^ツ中^ツの^ツ妙^ツ乃^ツ院^ツまで^ツや^ツつと^ツ尚^ツ
長物

芋洗評

一之
麟鳳の如き本^ツを^ツ受^ツて^ツ時^ツは^ツ時^ツ風^ツ
初^ツの^ツ鼻^ツハ^ツ口^ツに^ツは^ツは^ツは^ツ何^ツれ^ツ敷^ツ度^ツに^ツ控^ツ
洋^ツ紙^ツの^ツ麻^ツと^ツ敷^ツく^ツて^ツ笑^ツこ^ツる^ツ 藤松
大^ツ園^ツと^ツは^ツ後^ツ女^ツ帝^ツと^ツ朱^ツを^ツ后^ツ 木質
小^ツの^ツ利^ツヲ^ツ持^ツ家^ツに^ツ友^ツと^ツ出^ツ給^ツ任^ツ 株木
万^ツ民^ツの^ツ魂^ツを^ツ哀^ツれ^ツて^ツ後^ツて^ツ抄^ツ 佃
易^ツの^ツ敷^ツ有^ツる^ツで^ツ日^ツ本^ツハ^ツ易^ツま^ツへ^ツ 目佛
清^ツ非^ツ孫^ツ補^ツ佐^ツの^ツ出^ツ還^ツも^ツま^ツ日^ツ町^ツ 株木
万^ツ民^ツの^ツ父^ツ母^ツ出^ツ田^ツイ^ツも^ツ子^ツ持^ツを^ツ書^ツ 三捕
自^ツ然^ツの^ツ序^ツ或^ツ威^ツ出^ツ中^ツれ^ツも^ツ口^ツ非^ツ心^ツ 文志
危^ツ者^ツ風^ツと^ツ哀^ツれ^ツの^ツ長^ツ食^ツ任^ツ 水臭

非代も曲の端ハ約の針	松鱸
非でさへ穴いろまの娘の乃	木賀
大用とまてよ年号あるところ	雪下
六地養ぼんぐくの池すがさ	木卯
法まれば凡み天の小天地	呉竹
冷ふてまてくそ高しやるとメ	一之
蟹の後より戦中の後口ひき	早聴
折るや小松の中よ天狗ぢふ	麴丸
大根わりののよさうよあめり猫	早聴
虫か織り出し中とめきふ	橘四
刃中の虫いりごと知らとふり	重丸
いり屈坂の字よづこのあふあり	巨眼
秋の蠅まきりよ孫の蓮の飯	卍
おまんのほろろ小指ハ口かあり	木賀
消ちよと天宮メルの名と帯	佃
くまきりよまらふ牛の病あり	豆居
牛の池せんハ豆腐の桶よあり	笹鯉
糸の鼻息うむを老やうよ出テ	綾丸

萬里をまわりや属せしれりまはれ猫 大津くまのれが糸回の上り口 うのり子まの旅でもと 茶 喰 急瀬より 纏さるせりすは遠し 字余りの催ふるまうふ下の空 雲のくらくま摘花にほろふ文 まましくやうてを片目ねむる矢原 口の切の終次と弓男やうとこらげ 災イハ下タエすのめので出来 水の衣洗くくニ度の色垂し 妻の女房はきせうのへ帯とメめ 光陰よやの字の帯と糸でしめ 張りよの多廿新室とのふ巻者 孤織の糸天ののぬと唄てる 帰りのあの人買くとある梅若忌 昔袴まを七草の敷よ入レ 兜袴むのし 燈をを入れて出し 川と他あうと 秘佛ニ辨上テ	風松 花菱 魚交 千之 杜蝶 古扇 扇風 雞肋 糸人 綾丸 風松 春駒 狸声 巨眼 うの 集馬 子安
--	--

その傳受も日本記も古今集 花蝶
倭 暹と大公イヌキ昔の子ととて 一之
樹下ハ花屋を石穴屋を屋之 柳泉
藤長屋 立少使ハ柳ヶげ 奥遠
師とあるるる屋 乃及ぬ寺 集馬
似と非なり 桐ノ鷲 牛ノ 猫 文志
そ外ハ度改ハるる目くらと 升丸
るけ皆ノあが 挿目尼えあり 真山
立岸一白お裁て 恋云々帝 奥交

まごまごするけと春むけさるる晩
此急キの時 抱うるとちうり 石ノ 松歌
中ノのまよ葉をうらむ 救急状 竹子
まありかくとあやうと善紙り知 其成
不仁者の楽ハ山ハなるとつれ 巨眼
仁和寺の納所山原と叱りつけ 迎茂
あやうくハるのまをする けよ 賣 叶
ま角を心ぬれ了 経師の剣毛け 再 柳葉
蠅とあへともま世よ名とあし 一 ち丸

于奥の砂で信友の義を磨き 木賀

鯉がハハ古依日記ありそまきのろ 柳水

是と非ととよく問ふて耳袋 コセイ

表裡空まをみ袋白うらり 一之

元捕か袋かおの程を入ま コセイ

極密と知り仲光で糸内一 笑丸

夜中の清きぼつておぬ乳へひき 水鏡

極く片鄙人お出よ出十郎 春駒

佳子ハお梅おぬ徳の片よりち 七

張ておぬ乳ハ菊屋と雲が思 迎茂

賊立てておありをりま加田の浦 登志丸

市の子女ハルミヤ草布どひがきれ 七

座人の悪友ハ虎と文ッくら 木馬

裏ハ後殿毒を花の雨一き七

隅田の花鏡波おつまの裾のよう 木卯

信玄のちおしくびで觸れ只 青志

姉川で織田免よあうぬ妹尊 合

虫味方もおとす多うの石を投げ 迪茂

振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル 振ル光ル	品能 貫雨 青波 早牛 辻木 木質 木質 青志 藤波 杜蝶 百太 血廣 豆泉 五毛 其成 春喜	振ル光ル 品能 貫雨 青波 早牛 辻木 木質 木質 青志 藤波 杜蝶 百太 血廣 豆泉 五毛 其成 春喜
--	--	--

寝と寝とやあすとかわが挿束尾 升丸

津の本と女様して序返孔 居遊

せり号後二あく出たと脊負てある 里鳥

字のちくも昂もぶら弾りそろう 里扇

ぬれてもそろうあるのハ合取龜

煎林で食えと昔は喜ぶぬま湯 木智

軍を乞へ一生の縁あくる権 株木

藩を乞へも藩自正しき二本がー ヤセン

日本のふとをさうしく、遊くゆき 一之

梅干とをぐして紅まゆすぬとあ 梶井

皮切りハ冬やハのやとか七 貞龜

大肌とぬいて小んごとのせや買ヒ 猿松

ぬとぬ飛やと是えとそろうが 早牛

其昂ちくもが又買ヒ 涼豊

豆とちくもらうらうらもくさぬ うぬ

医者出世教うら持のに板がご 里鳥

叫ぶあらし世居のあで版と喰ヒ 木馬

居の甲と羊履をおろす 九

此門亦及八家初びつ々し
 家胡尾で一帯のち麿香猫
 中り芝居より◎屋のありと云
 十目の「^子」^子直の文字
 大味チでるひと女帝の吐瀉
 居居り芙蓉も娘は目くら山
 ち「^毛」のひやいと終「^{ガク}」^{ガク}後ち
 文水
 △廣
 松鱸
 我虫
 杜蝶
 柳泉

礫川評

大陽の赤いときざらぬ寅の刻 狸声

静寂にぬる夜も安キ君
 山と酒海に名前の所非思
 名も^{オコシ}舞とまよふは^{オコシ}花の法
 中るあまののむる月色の舟運の
 万葉の口からさすもせぬ
 不二山が^{ツネタテ}潮立りし
 水魚
 山笑
 呉竹
 辻木
 帆布
 三捕
 白蹴
 梅丸

ゆきら 鶴と丹て 菅も 一及 ち死 山猿

何厨と 女三の ぶら ねた ぐね 仕儀

おのひ きわ 門の ぶら ぶら の 居遊

兄弟の 名も ぶら ぶら と 首 隠山 錦袋

字通し ぶら ぶら ぶら ぶら ぐ 巨眼

天竺と ぶら ぶら の ぶら ぶら 西 五 母 雪下

ぶら ぶら の 一 ね 八 ぶら ぶら ぶら ぶら 川 釜水

ぶら ぶら の ぶら ぶら ぶら ぶら の ぶら ぶら の ぶら 古京

解の 建も 田 ぶら ぶら の ぶら ぶら ぶら ぶら 要宜

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 老菜

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 管子

十 ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 風松

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 三浦

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 我出

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 三浦

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 集馬

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 文志

ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら ぶら 文志

ハッ 改 妹^{イモ}を ぶら ぶら ぶら ぶら の ぶら 麴丸

ひつろ丸八おろふと橋でつぎ	小丸
猪おどけ引板ハ山家の小よ松	杜蝶
江戸と的矢をひり船の八枝ハ橋	柳葉
月のあはせまうてくさど下の夏	迎茂
きあれと信金多う久きまはげ	巨眼
糸の花あづまをちよの隅田づと	旭山
つらもねへ碑ハ親あへりる日向	春駒
笑ひまな花々山菊よさくむらり	水魚
伴の町植ふる葉あはたのまへんま	壽婆
まあま高も男ハまらびぐらまら	杜蝶
横揃も月のさへ入るくや娘	呉竹
二ッちき二圓一の口方 面ハ	今
六日一ッへそあをうり の名	要宜
碑の今も三十七七の馬へあり	奥文
眉雲のまきハ夏の二十チ山	春駒
長女の花家一チ是於季白縁	水魚
あはれへ久あもあうらう一丸	叶
花屋とこのよせだしてあとうる	

赤もあきて富士の雪もきれなり 三枝

赤い風も時のはきまのぬれなり 真交

夏にたそあはれをたづねて寝ると 乙丸

指づるとほくへきやどの艶次第 綾丸

あまのなをとおる幸海と唐の雲 亦楽

風流の海とあふ川柳 山笑

梅葉の去るまで吉田のまり火弁 錦糸

法をめぐり葉の根をわらふ信のひこ 水鏡

新しきものがあはれとあはれとあはれと 柳

針糸へ 並まるとる一朱割 麴丸

今時ののろもあはれとあはれとあはれと 巨眼

あまのなをとおる幸海と唐の雲 巨眼

名代ハ改題のあるる合款の花 巨眼

細麵とせり出るとる裏階子 カスミ

あまのなをとおる幸海と唐の雲 清尿

あまのなをとおる幸海と唐の雲 二葉

あまのなをとおる幸海と唐の雲 未青

あまのなをとおる幸海と唐の雲 風松

あまのなをとおる幸海と唐の雲 風松

上忍本郷と見とがめ殺父娘	佃
其のく屋のむで <small>ヒス</small> あまを喰ヒ	痛泉
八高入並キ去春ありさくや娘	松哥
押く戸よ喜合舟の人見	早聴
あまのこせの鳥かこふ一の英女	佃
富士を極よ天方忘ねらふこ	雪下
あまの海へ流す助ヶ手云々	都友
ゆりくハ安あこふよまへた暮と坐	古扇
うまどろくふゆもさあふあの前	芋洗
新猫であやうついであちくさうめ	春駒
揺らく春故屋へ尻さむぐりこそ	呉竹
男まが来くゆ焼と消々女落りぬ	芥凡
丸を扉へ葉とをそく喰ふ花の	梅舎
春の代の芝居少安ハ麻の足	帆布
治世の軍勢おれあふハ多きうて	柳泉
又ちあつ風只さきもけ世のうた沈え	未青
いそよ位きを承知と法書ゆて	狸声
後梅と院御あまこまうあ	亦楽

戸張りのふ二へ娘のりのちまふり 猿松

秋こそく庵のふきまきつれぬま 五毛

酒と止まされどやうろろ後がけ 佃

幽霊のまゐるつひらと 柳泉

けうあよあを月ゆきまのく 牛住

あられふ登るけけく 龍戸村 貫雨

侍の吉六を常のあよまそとらぬ 井右

可也い子中々後でのと茶あり 喰 真交

草けハ安海山か喰とらぬ 木賀

よく塙て空けが和島の火け 風松

そのりときを少のねせとよ赤巻る 百太

あまや投ヶられてあま へ原路 延茂

兄流と去友唐つよまらるる 十九丸

その門古まのが又雲とら 南豊

人が情とと洗とくと止まらぬ 三捕

縮毛り 夜暮りの 風松

り女がアヤ 長助このの代がくろ 雞肋

所々 眞良 浮城重門へ 佃

川柳評

御親教ノ長生殿_下 此_上之奇 水臭

此_上同運佛花と門トへさ_下せられ 綾丸

日の本ハ赤代の中_上の時津風 丈志

己_上が若子國ノ凍_下敷の_上の_下け_上は_下 礫川

梅へ義理ひよく是_上悟で二_下夜_上遠_下劫 株木

ハ梅_上知る_下若_上を_下敷_上も_下 割_上の_下者_上 全

先_上こ_下う_上頃_下ト_上か_下辰_上と_下 宇_上せ_下あり_上 水鏡

人_上道_下ウ_上の_下性_上之_下 信_上の_下一_上字_下 あり_上 壽山

室_上を_下よ_上ま_下が_上獲_下と_上ー_下こ_上字_下の_上 月_上 長物

我_上の_下ぬ_上日_下の_上かん_下ち_上で_下軍_上女_下 又_上る_下 赤奴

降_上ま_下よ_上晴_下れ_上る_下 継_上の_下袴_上 継_下の_上衣_下 芋洗

男_上よ_下ー_上ま_下る_上 此_下並_上無_下ひ_上イ_下チ_上ウ_下 成_上る_下 水鏡

縁_上と_下さ_上う_下せ_上と_下あ_上う_下ー_上ま_下 此_上さ_下ぬ_上 恥_下 是成

恩_上の_下世_上と_下若_上ぬ_下と_上た_下る_上 又_下此_上救_下の_上 船_下 杜蝶

高_上と_下く_上る_下 一_上月_下と_上対_下面_上の_下 亭_上と_下で_上 浮_下る_上 三捕

か_上を_下さ_上と_下て_上 此_下世_上が_下あ_上う_下ー_上ま_下 此_上割_下キ 貞龜

英_上其_下の_上代_下名_上を_下る_上 出_下綴_上 振_下 猫_上 眞 佃

九節多傳が武切ぬれよてあんぢ鷹	木賀
車の前でほをふる乳の吟味	叶
初冬とあつまきかき一葉辰とぬくまを	木卯
上まの白が雪と流ルが切るとこ	里扇
玄糧を歌よ喰けりこみ智累	集馬
小島のまきく接あか友よ水物任	株木
海へ入るみきとを山よ水志ひ	佃
永キ代と後背おつて雲がとり	井
水電樹の外を百貫入をせられ	連茂
水に改皮書入とくもり一	文
日の光り荒う一山の二字が消え	三
發まのハ改末まぬさぬこさへ	綾尾
川と池あうと秘傳二舞揚々	子志
曲りゆゑまけぬとくの在傳目	趣丸
内春ハ馬よよ葉れぬ水歌うと	株木
水に改秘書おのこで渾か	文水
牽せし牛よるあよらこま	鶏肋
近江のハせ々大野戸ハくぬの成	血廣

猪の骨を煮るに用いる。板常

清く煮皮。むくやうな瓜生山。早牛

夏産産のふたつと又たく。老菜

ほーが長く。木卵

あやい。ついと大キ。十九九

はるあふ。扇風

水治

水司

三人。株木

堅丸

良禽。葉

杜蝶

風松

品能

巨眼

松鱸

風松

南豊

南豊

廣くけく胡蝶の巻と巻の旨 松歌 終るうゝ其ハ法と討トられ コセイ 勇士一ト色武者おふれ義よ泪 青志 るふぞと此云むうゝ血の巻六 叶 六人の杉戸七尺去つて燃え 梅鳥 冊吹味の下終と今巻とるス巻 亦樂 五更の巻を赤巻るうゝてあが 株木 小坂山猿の生き塔ぬく不 夢中 此巻の巻の及ふよ老の敷巻を揚 辻茂 之園ひぐく虎後のさうさひ 糸人 あよ武者一日あふ傍の山ざら下 佃 下巻も今巻げあふの片男皮 一口 獵犬の巻死ら者の巻えあり 叶 コロ谷の孔明司ると焼まじ 品能 悪く巻の終とひぐく大江山 三捕 き嵩巻式アが巻上巻の月 柳糸 後巻上巻列と終巻がみ山 一路	廣くけく胡蝶の巻と巻の旨 松歌 終るうゝ其ハ法と討トられ コセイ 勇士一ト色武者おふれ義よ泪 青志 るふぞと此云むうゝ血の巻六 叶 六人の杉戸七尺去つて燃え 梅鳥 冊吹味の下終と今巻とるス巻 亦樂 五更の巻を赤巻るうゝてあが 株木 小坂山猿の生き塔ぬく不 夢中 此巻の巻の及ふよ老の敷巻を揚 辻茂 之園ひぐく虎後のさうさひ 糸人 あよ武者一日あふ傍の山ざら下 佃 下巻も今巻げあふの片男皮 一口 獵犬の巻死ら者の巻えあり 叶 コロ谷の孔明司ると焼まじ 品能 悪く巻の終とひぐく大江山 三捕 き嵩巻式アが巻上巻の月 柳糸 後巻上巻列と終巻がみ山 一路
---	---

落候 魁の 照君と 胡るまき 狸声

梅屋の 歌へ ぬらした 安楽寺 老菜

此の 料理 茶の 湯の 是れ 丸石

文字が 実なき 蟹の 子も の 跡 松鱈

玉の 皇子と 里の 子よ 莫邪 鶏肋

桂麿の 陰より 歌へ 初七 冠り 水鏡

消ゆる 雪馬 蟹の ころろ 白髪 未青

蛇ハ ますみ へ 坪割の 搬来 漆 木卵

琴を ときく へ 箱抄 一月と ぬき 柳糸

雨夜を ぶ 案女も ぢく へ 虫うり 梅丸

田天王 金剛 杖を 栗と むき 松下

ふゆれぬ 具名 後六 塚と あり 松虫

いさひ 月さ 禿 髪 鬘り 枕を ぬき 笑魯

去る 足と 花を ぬき 春 隅田の ちり 風松

富士 とも 足え ちり ちり の 日 卒 摺 草季

白川と 志 望と 妾 語と 形 娘 戒 叶

三味線と ひく へ 佐 竹の 小 島 阿 弥 之 集馬

葵 情の けん あり へ 家 ころろ へ 未 廣

和訓のいふぬ悪体ハ三森阿房	痛泉
みぞ指坊は田舎の屋敷の武者	う原
むらさき一平ハ三平の入院あり	平口
紫竹林の一軒をらるの一寸つら	加丈
松うらやんと丁首の浪たえ	木賀
火起院の決火を焼も徳也炭	清屎
釣ルも鱗よのころ子の胡森	柳糸
控三が凡世を吹てゆく鐘が園	柳泉
下戸自慢は唐代酒ハびざり	巨眼
ひさかたおんたあきまの羽の移方	真交
瓶チあら破戒の傍といつッペー	一之
よくうをうつきんを舌とくはくられ	大笑
仲町と去る子ハ百歩場	定丸
へありと撓めては揺りハいふ	松鱸
鯨仕まふ馬足春の女うよん	巨眼
此之が大勢屋まもあふし	五毛
五十年を過はる男ひまを	其程
仙女界中り良の外を志とん	叶

姐板へ男の簪を足せしむる
うぐのふあまの奉り砂利をうの
よくあまの波をのいしむ耳袋
生しむがまのいしむ傷をうの
秋の月をいしむと鳴る也
夏あめりかといふとま底に
雪月花をいしむあまのいしむ
やまのあまの木の葉も交る
えまが内い感細ひいしむ
災か上りいあまの

芋洗
青志
杜蝶
馬石
麴丸
其成
要宜
虎丸
芋洗

四社 六社 田極 泥の せんぶの
浄坂を五位のところと
大塔の七放蕩ハ、
葛まがとと海老の里の
登スあまのぬ生を
世よぐく易きのあまの
あまのいしむのいしむ
世の例康をいしむ川も

株木
杜蝶
株木
巨眼
清尿
コタマ
株木
三浦
杜蝶

極々あつ〜時平梳系登鳥 木賀

罌ごご依々木酒と方こそろ 笑丸

牛乳とあがらうも大南り 青陵

俗名よあつぬのこび切てきて 菅子

英徳と蕪々鞠山石の室へ秘せ 藤丸

初茄子と酒へぶち込△東ッ子 梅鳥

いせ海をよと文せ太くの早も尺筋 水魚

内裏籠隠んでんろくふとれあり 文虫

焼火と〜麻と〜尺と〜ぬ肉と〜起キ 井蛙

庚寅の伏あつと聾一鈴 為々 巨眼

ト戸も入ありとと湯田のささ下帳 魚交

傳言ちを考のあゝさをつれろ 升右

ほのろの茶みの虫強よ身のひひり 魚交

花ざらり 隅田子男の抱ぐまひ 未青

破ちの花えよ枕のふ初経 魚交

丹波ちよいし鞘ハ粟 たくき 木賀

猿搦のふ糸衣るまハ粟ぎぬる 杜蝶

火るぶりと子供よあつとと字後の友 帆布

片屋裏幸施の契日ノ赦免あり 麴丸

かつら及ヒコト名ノヤセる御成持 亀楽

る拭やまあや光明さあ清利 青志

之後とこら筋 天神うとく了 玉丸

天定うもを鞘のある立烏帽子 松鱧

作于物妙せし妻子女のひ半 巨眼

将のつとあふ 隠居の幕が唯々 集馬

ち多ぶらう安あどくしてあ恋丸 佃

乳松は梢や鮑がひつ 狸声

犬夢をひくく猿のの中きさる 真交

死出の田長八経をむ菓うと立 杜蝶

天井かひくあう夜八平家あり 角丸

多子あよ舌塚をつくあんま堂 青志

たのるよーは 何と妻の橙はげん 松欵

梅若の古よで吉田の掬火うち 錦糸

鳥子の蛇とあつぬのぬらふくろ 木卯

下エの美流留毒よ落失の根 風松

娘でハ梅と登れとと おゆひ 佃

一粒令丹方書で終んましよ	文志
一朱切の女交搦のぬき屋	集馬
身振して世を捨てて宿上り	巨眼
今時のたふあれを庵の汁	今
うその登人たるやうな浮ん節	梅馬
やるとちた君のたな女の子は	柳泉
たまされて換斗りまゝせき佛	堅丸
江戸へ書くまゝかたの後の	三鱗
出敵上の川越とある旅切者	松鱸
納ち力九段勢がひりう流	三浦
かゝる鼻のまゝもろく明きてん	鵬加
おゝる仙劍たんとまゝうり	風松
傘をさぬうらみか庵を新かゝ	カシワ
生餅よ喰れて困るゝ	ぬれ
春のせむし地づく答ふも佛の	迎茂
目よ滑りて書きよと念ふ	堅丸
終る麻城建坊でまゝる鬼	真交
韓信入小田平町のまゝ	玉丸

仍きて見やみのまゝの 十か一 生碑の女房様と多ぶれと云 乃焼よづんく草の影と 湯河原よ豆の痛んぞ 都隆が返りけ 草箒おのがちり 胎よ縄足と一草 破のまうよ めくるまうと 敷さねるま 出園作 吾法流先 母も味方よ 泊の猿 風そたよ 去ん丸よ せり是後 始末尾の	豆泉 水奥 麴丸 花兄 出齒 草季 居遊 木馬 花鳥 亀乗 春駒 佃 夢捕 如水 如山 里鳥 杜蝶
---	---

虎か白玉屋建屋ハハハハハ
後殿と引の捲てある富士と千代
矢校うと漢語うき屋のよりの雙
いろの月も白く髪とさく髪とさく
門ト並よろまひのあつうき世あり
兵庫ハちびし様赤ハあつこぬき
法華寺三層まらつておととけ
兜魁の蛇籠菟菟坂とのんご居ル
中々まきと一丈も焼ハな
元住

あねとらて焼く屋のあつあつまで
あねハくハハの方ウがえんを
小侍ツイ口上と忘知ト
儀の忘りよヤハハの音もあつあつ
とねとらきりせと持てりりキ
天井と物と並よまら木とまら屋
板井堀の屋とらひどの計匠あり
朝ぐつり女房の物もさくさくも
えおつりのゆびと擬宝珠とまらつ
帆布

巨眼

水治

柳泉

金成

二葉

猿松

雪下

風松

元住

可交

古京

細

今

廣

木馬

木賀

扇風

帆布

こまりの犬も妖猫の姿のちり	松鱸
あまを総引いてくけたる金花山	木卯
後縁の淨瑠璃あまの世利公	マツミ
鼻が折れた紫雲の天狗の耳をまじり	柳葉
赤子坂あんのどくよころげ赤子	雲人
抱ひよあはれあまの足踏が運入	光頂
つととあくらく世とよる細工	風松
菖蒲よよ底とくも世持	扇風
車輪をまると流るるあまの世持	井
要の南の口舌ののりてまると云	奥交
唐人の夢の中は虎とくけり	木馬
あけやりの鬘へ西瓜の色え結	水治
蕪の次郎袋を馬の首へくけ	巨眼
お宿の面よこまのつとる天狗の子	真山
五寸釘天狗の髪とくけ	柳泉
破れ傘面うあてらるく車	巨眼
喜田やがむす子ののり仕旦也	迎茂
壁下よのたぐい蟹ハ子と吐り	出番

鬼子ハクまか奴のわき久 居遊 けりしのみで改ル令屏風 居遊 いてるほぞ承知ごと候美ゆ 狸声 伊とくうと約束の明がと 近賀 控もとあむと吐る玉敷を 迎茂 雷も御も並ぶる安んゆ 佃 大根おろしのまざりよあやう 早聴 吸口へおつごあきると助え 一路 下女大根六百と本わらう 里鳥 御井眼病者ちがうく鳥の 青志 久後いりく名代も候ざん 佃 紗糸のあまのゆうま香の下 英雅 辻あハあまをあれてあまを 麴丸 山伏は泊る一ツ寺の候 五毛 後の鼻やへいまるこれとセチ 光頂 穽多の子を先ッ陸くと利 佃 娘のりありがぬると出て 青陵 傘さして歩ゆく竹原よ 要宜	鬼子ハクまか奴のわき久 居遊 けりしのみで改ル令屏風 居遊 いてるほぞ承知ごと候美ゆ 狸声 伊とくうと約束の明がと 近賀 控もとあむと吐る玉敷を 迎茂 雷も御も並ぶる安んゆ 佃 大根おろしのまざりよあやう 早聴 吸口へおつごあきると助え 一路 下女大根六百と本わらう 里鳥 御井眼病者ちがうく鳥の 青志 久後いりく名代も候ざん 佃 紗糸のあまのゆうま香の下 英雅 辻あハあまをあれてあまを 麴丸 山伏は泊る一ツ寺の候 五毛 後の鼻やへいまるこれとセチ 光頂 穽多の子を先ッ陸くと利 佃 娘のりありがぬると出て 青陵 傘さして歩ゆく竹原よ 要宜
--	--

幽霊の音色はくひらきともち	柳泉
之途川お菊生きと亡老もき	集馬
おふしそむ女火の湯瀬火いぢる	千之
宿屋よろつき二階大さきとき	綾丸
四火とすりむく衣聲入しと喚	狸声
夕畑の奥の名前の大尾あり	風松
まるとある日ありふりあつるま	清屎
瀧石とまやがりお遠敷屋とゆら	仲茂
とんあつむ女とひんをきかたひ	大水
手比のま見しる糞とゆつまてん	十九丸
香房の養理知りの屋上紙とゆら	水鏡
天竺ハあられぬ髪の意味の	真山
白髪と虱勝辨がすきことゆり	カスミ
おは旦那屋でたぶきの毛もゆり	扇風
おん猫の越屋髪免の終かあり	奥交
乳母の宿山伏井戸の芥たつら	大虫
指きめりはよきとむ夏とゆら	天路
引せむいせきもこまらりかゆり元	ヨロ居

ふんごうの	彦ぬとつ	く角力丸	丈袋
十穴のうち	く不用ハ	紙の穴	古扇
まのこころ	の文句	まを造	ぶらん
三浦			
後ノ	乱と	なれぬ	園の
鼓			
大小	猿	月ありて	出ル
金	銀	床	青志
男	あ	あ	あ
機	の	星	武月
乳	母	か	ま
品	能		
松	毒		
早	聴		
菅	屋	が	又
ち	き	り	を
つ	つ	き	わ
く	は	首	西
ち			
尻	の	中	を
初	松	矣	
梅	舎		
集	馬		
雪	下		
柳	泉		
扇	風		
巨	眼		

岩のふもとに草木のまじりと天物の屍 柳泉
 池のたもとに宵いで池の底をさぐり 貫雨
 なるかえりゆくをとおぼしめしハミ 市入
 ことさけけし子葉を採りてさぐる 五毛
 ふんぞりと引あがりまふ夜這と早 千之
 病の医者不法人の屍で飯を喰と 集馬
 お七あふ小舟の舟が毒と知り 傳子
 人をとる遠く天狗瘡のうき 木馬
 おびのけ子と飛びてひさくたより 笑丸

小櫻八景會
 扇松評 百景八編

うか飲たるこつお隅田の音丹花 錦重
 老の波は浪身の小川を圍ふ花 叶
 傘張りの子よ持切きぬあか下 株木
 夕べのりあをを確あかり振り 氣六
 奥いもを奥い穉い所の棚 木卯
 指の血でおあふ床点の鏡世あ 竹賀
 赤石銅姐夜が床で斜らぬ 巨眼
 窓魔後ろど月影も 梳川
 竜舎

真角が点式装束の海より不意に
 ツイ深入りの奥を透る白狐殿
 舟を地岸より布きしは井田川
 皆思ふをまゝに波乃に迎は謝
 里見家の八士ハ智勇大徳之
 とも日すまで田をまゝにわらぬを
 新三世草子まぶらむこの海も小指
 海山道のやうにまゝ田乃をせむ
 嶽人の池田伊丹ハ一本木
 梅里
 醜郎
 三箱
 松丸
 樽美
 株木
 醜郎
 錦重
 楓枝
 乙テ

子休る月日の毒くある夕景作
 夏やせよ康安のるめる大井川
 わんよそをわらハ戌の年 姑申
 文科のよあに月の終仕並
 池の鴛鴦斗りの 魚 籬
 涼の舟へ照り鏡子の 舟 肴
 もりのあまを 崋刻りか 藤者へ
 初^{天尾}ての宵月のくまむ 咲ヶ 淵
 梅里
 醜郎
 三箱
 松丸
 樽美
 株木
 醜郎
 錦重
 楓枝
 乙テ

巨眼評

をの波浪見の小川を園よ五 叶

夕海を竹ッる尺て居る小蘇葉 崩六

かせぐ牙のあごよ思ふん赤造り 楓枝

利根川の浅浪を流る 瑞の瑞 錦糸

遍服が赤牙美磔も花の色 叶

雨妻のぬらさを流さる玉衣を 鞠丸

天慶はよ公家悪の七変化 株木

先尖壽痣の肴板おま 画き 嵐六

まきと根象眼の室の君 竹賀

勢と化しく頼豪の三代目 氣六

大予もまきる波河の飯の湯氣 木卯

指の血でおましく床忌の親世あ 竹賀

蛇ハ寸ふしく浪の立ッ 麦 畑 小海

う仲の馬を汝田へ 巴入也 祖山

壳の虫宿天誓絨のさる序音 竜舎

初めての胎眼のさる心児が 剛 柳泉

床の橋よまかッくし 夕 涼々 千之

拿玉の子が流るる湯をそたれ 竹賀

七夕の客も一夜貸し 浴衣 竜舎

祥の序をを知子身そ 踊られる 鶯童

能も何の谷の渡も 夜涼きよ 乙テ

ありの此実肌ぬぎも六かき才 竜舎

斤ももろる氣かゝるる三田の如母 乙テ

あられる扱柄鏡も 三の切 乙テ

穉作所家根又帆徳の紅毛字 錦糸

池の鴉 男斗り乃 蕪 藪 山櫻

瀬川艾て日三里の旗あやほ 錦糸

堀の紅糸川瑞の辻 辰 僕 木卯

泊る深き南國の女護 竹賀

梅下ハ秋田の娘が鼻又つき 野萩

大小しきよく寝るのも一ト 赤子

あ身の浅深よ糸 扱キ 衣紋 錦糸

夕アのあ身を確氷も扱う返り 扇六

さん浅の足踏ハもけぬ 猿田彦 錦重

を雅で冠ハ 森田屋の松木益 麴丸

る床なぬあのかよよ草と 書キ 扇六

おせよもをむれ生田の尾をり 梅鳥
六の熱 臍刺し丸の字 竜舎
夕ア氣のぬ采かてぬしん 梅 麴丸
大尾 慢 匠之 隆 康の ぬの 之 後 如 錦重
題美橋の屏 千之評

備りよきくも 扇の利しよ小玉限 扇松
柴矢ぬ玉 渙又の事秘し 巨眼
九指一々 智をよ 出さ 後の中 烏水
きれくよ 来て 困ら せる 美 喜 喜 竜舎

馬上くくふくふよ 矢 昨の中 次 梅鳥
終りの 橋よ ころ 近き 出 殺 川 巨眼
終り 接 燈 水 あり 冷ふ 玉子 乃 竜舎
日本橋 股を 終る 道の 中 喜 喜 錦糸
二十に さん ころ 深 舟の 矢 六文 竜舎
天竺の 弓 あり 矢 場 の 倉 三 浪 錦重
馬 柄 抄 の 矢 立 橋 へ 詩 を 紫 叶
人間の 千 石 を 一 屏 が 涯 文和
箒の 逆 橋 へ 荒 を 帆 立 貝 錦重

橋の脊骨を渡せる 際ある人 三朝
桃青よさうらりたるを 空ぬし戸望の匂 竜舎
菟鞠よ積る 橋板をぬきり 三箱
采色一やく引きの小ぬら 雨 木卯
夏衣の冷仕と 赤衣の朽と 下女の香 竹賀
洗ぬきたぐへぬる ぬきぬき 乙テ
執事とぐに伊豆橋をすまてり 竜舎
潮臺の蓋の 盗人もせらぬ 三朝
橋をぬき見し 投ヶ橋田 株木

株の葉を思ふよ 根株の奴使 錦重
何きぬかきんくが 息子の出さる 祖山
^{大尾}橋の股ぐり 割込の けぢぢなし 錦重

芋洗評

ほよふ葉をさらして 軍まゑの 風車 竹賀
光陰の矢文 三つと 伊勢て 出キ 竜舎
井のの ぬれ 伊豆の 帆し 乃み 株木
葉のの 後糸 洗敷や 八幡 竜舎
乃み 帆の ぬれ 乃み 田子の 風士 錦重

下をくまゝなまねぬゆゑの二子 橋 乙テ

粉の匂の運も吞込んで祖作飯を 扇松

丸指一せの髪を牛とく浄の中 烏水

毛の沖又帆糸もよぎ石とさる 巨眼

ぶたりあり又ぶたりと 橋の上 全

貨よまきくさの刺上やよ小玉浪 扇松

もろををゆりく文字へ又よこい 錦重

儒の長よあれと号んよ機を切り 千之

出ぬ乳をほく子の口へ箸をさそめ 竜舎

朱ケの片橋ハ思髪の新挿根 乙テ

後よえん橋ハ橋 城の曲端内 錦糸

撥をたおらふハ松茸の 園両 竹賀

まじむ帆又風フウとく六葉匂あり 梅里

撥羊衣紋具合のころん火の柄 株木

五合帆とく江戸へをりてむ米の船 祖山

撥酒うりつ氣をり又附ケの水ヲ流す 三箱

封メのやうな細身のさるー 株木

指の血とくおまゝとる思の祝世あり 竹賀

真のぶらり〜高き船のうの字川たき 竜舎

輝りの中よ極楽が 女 川 竹賀

お梅子の例よ日の 身をも明け 木卯

中人張りのうはまを夫のよし 錦重

かゆりいそり〜〜〜〜〜 江山

客よりわくききよき〜 枕 巨眼

船ゆくきき〜〜〜 長後 全

はな 矢 舞 了〜〜の 飛 乃 具 全

独い 極 端 ありあり 王子 竜舎

イヤあらん イヤハヤありり 千之

まふ 帆の 碇 画の ちま 六 樹 周 株木

枕ハ 船 度 帆 板 客 乃 候 鳥水

大尾 鏡も あり 鶴 足 心 あり 鏡 乃 橋 千之

栗津晴嵐 錦糸評

ま〜 霞の う〜〜 あひ 晴〜 天 江 心 赤子

そ 霞〜〜 あ〜〜〜 冠 皇 乃 易 三朝

津 將 登〜 八 方 過ハ 内ト 介ト 木卯

磯 系 乃 精 乃 妙 乃 俣 波 源 乙テ

侍従の正名の世又晴し十三枝 醜郎

本多りの流で志多入頼る山根 赤子

小お尻を去来が通く柳 柳 佃

萩をる藤と車下の下も糸人 巨眼

くろくを丸くする能く屋机 木卯

南都のりまの行よせぬは時年 一

音晴れて日又磨くは 後心 竜舎

は嫁子の扇衣猫遠に致が透 乙テ

藤の元世傑のねんは 木卯

招んでくまののく 今も孝の教 竜舎

授子桑の印へ 鼻息のま 今

井樂堂 巫女ハ 略馬の玉は信 錦堂

白綿を 中ハ 教妻の玉は信 野萩

早智り川 拵よ 成る 晴雨傘 錦重

常世が 越之積 愛杖の底が鳴り 竜舎

なうくれよこまのく 船の屋津焼 三朝

石味 海地川の細の 級校委 三箱

糸の 苔の具は 紋よ 野萩

片の影新冠平の紋よきけ 株木

後口髪引カク身之の丈 醜郎

釣鐘のお尋ふかのはらあし 株木

夏でそひ葉を花ハ葉を散らす 巨眼

枝芝居片の苗さるふハ因り 鞠丸

子に家業譲てわらう葉の旨 楓枝

栗田口いく玉ととわらう 箱扇

三年目娘時ぬくと星月夜 三朝

大の字を隠す小舟の東山 竹賀

村日侍葉のつ子を教へまは 三箱

娘への瓶今日うら時てわれ 千之

お金の伏勢下女へ志摩が嶽 巨眼

尻大尾をくくくの字ハもんど後大尾を 叶

鞠丸評

らるく小者のるるる 粟畑 三朝

そり掛ハ時をわく島主ハ片あむら 叶

子よ笑顔させらハ候のふくれ雪 株木

牙の紋ハ朽れ朽らび盗すれど 嵐六

子をそひ神又高ましく雲の鳥
木卯
芳晴く日又とぎ上系 後山
竜舎
冥古ハ凡の果テのハ此の之
叶
晴く秋又書て 隈あきお波り
乙テ
常世が追焚粟粒の塵が鳴り
竜舎
透る系不鳴り 三木の玉津橋
祖山
橋ぬけの武士 粟粒でもいげん
巨眼
晴くく日又雨をぬくせふ伊次山
野菽
重の牛又蔓のわらする自然生
鄙人

非凡又敷設多を健く深き
竜舎
晴く深うとみ一かく夜を掻ひ
江山
従うくで天極も晴る 蜘蛛の橋
乙テ
狐を狩福くとも晴る角ノ鹽
木卯
晴くく月又も星々のハ母の箱
醜郎
晴く後る夜も星々せる 赤の体
木卯
玉津橋くく楽天ハ腰がぬけ
醜郎
大津橋ハ才及おち雨所他武居
錦糸
菽をこる津と車く下る美人
巨眼

あつぐりよきんぐりのまゝ者奉 竜舎

後口髪むらゝいそくの 大鬼 醜郎

納金のかんよ次ちんぐん 様 銅 錦糸

粟細安壽三子 一目も 木卯

子をろひ眼もほつふは粟加 三箱

初草の傘まで破まる大鬼 祖山

晴天又地りのちんぐんつひり 錦糸

夕立とらんちせ銭の右たり 錦重

鬼のなまよあきほも 破き傘 木作

究母ぐけよ度いよ集の三陽蓮 赤子

晴雨を護せんころり あり合お 竜舎

鬼もよらんちせむろ森采登 祖山

手采た鳥のほろろん 孫子先 赤子

勢吉日のまよよ日割を安囲い 乙テ

粟旗曲梅よまろおん 梅鳥

西采程ハ鼻を赤ぬくトクム 赤子

天^大晴る雨り士虎より川をくれ 竜舎

粟^大物の穂よりふりてアソソ 巨眼

小櫻會字言返額(石山の秋月
豊田の落)

乙評

價同即賣田の去と令 竹子
廓の大小も坂下で下等
須保山のやうなわらわら馬砂積 栄川
南空若く山を掃てえる實地
高鉦を釣りと義経裏芳丹 採木
聖巻の舞竹村のわらわら 全
濃紙とやぬらぬ妻沼川の湊口 全

衣や 落子序をきつて二文揚 全
強合会河原屋と夏蔓のたぬぬ 木卯
令園寺をいかにわらわら 錦重
目筑と核軍用と田村丸 太郎
萩の津りて踏んでる 枯尾死 株木
お供のまゝ落しハ活 字板 巨眼
輪田のあまあま又極と付て 全
神寺拂ふ外我松の指子え 株木
馮屠の大黒神乃の山の神 巽

院久ハぢぢハ聖地下ニシヨ男 錦重
 田毎の月ハ移リ氣ニぢんハハ 全
 粉ニハハハ山椒 茨地ノ口ニ 竹質
 化ニハハハハ客入ハハハハハ 血
 母衣ノヲデ 階子トハハハハハ 錦糸
 甚ニハハハハハハハハハハハ 血
 二ハハハハハハハハハハハハハ 扇松
 丸ハハハハハハハハハハハハハ 野萩
 聖尿ノ面ヲハハハハハハハハハ 三箱

龜舎評

葉ノ根ニハハハハハハハハハハハ 三箱
 多クハハハハハハハハハハハハハ 扇六
 萩ノ隣ニハハハハハハハハハハハ 株木
 東山ハハハハハハハハハハハハハ 扇六
 ハハハハハハハハハハハハハハハ 木卯
 甚ニハハハハハハハハハハハハハ 祖山
 根ハハハハハハハハハハハハハハ 山太郎
 商人ハハハハハハハハハハハハハ 乙テ

山葵の穂解を辛うの蓋くそせ 自慢
 牡丹其香を花みそよ小西勢 錦糸
 ありありはく山猫はくく車く成 巨眼
 月よじりま福吟の唄へ 破 錦糸
 きくても化くあハおね若美石 巨眼
 六年の海を摩降れよ金魚の尾 泉鮎
 晒し草をくくごの美女の根よテシ 竹賀
 口をく手らぬくつふハと連て来る 赤子
 春が来て田原勢を退おされ 錦重

端はんふい世経の志てきき次田博 赤子
 立田の夜又あ渡るか汁乃らぬ 叶
 孝律の眼で風くろくく 居ふ 文和
 去勢のやう磔印の上ふ 梓 栄川
 耕局く娘く千毎のまき所 芝霍
 大皮の三味線くふく極る夢 赤子
 粉よくく山椒後絶の口業 竹賀
 熊谷の月の橋あくく 氏隆袋 叶
 入しそくく行くお香の絨 雨 乙ラ

麻島の湯治場 月又下り 祖山

流砂はさる石釜の落摩芋 錦糸

丸やみきと紙番糸の落し蓋 野萩

さうんたき肉月のおーまづき 自慢

竹子評

梅田も落釜の舞と朱川内 錦糸

山次流石権が張く 縄 乙テ

紅葉の小念小町よ大納言 芝霍

萩の藤くく張る 枯尾花 株木

哉群も萩の山田へ 下りふテ 乙テ

山長とく湯治場の河東節 野萩

神下は湖十が妻も と紙巻 錦重

系々度のもおちり秋の月の葉 全

月又しりまふ福々の畑へ 錦糸

又の肌も栗皮色の秋 松奥 鞠丸

秋の元厚字へあきん赤えんば 叶

八葉の雨代又 豊田の下勢古 芝霍

厚葉のまづあつとこあき二十八 乙テ

がらりと寝るものゝはるる様 三朝

社の日又戸板返しで下んふ化々 錦糸

夏も又月お晦日の二丁河 梅鳥

三夏見よふそれ者山葵の利よふ 木卯

赤色の女々目花石の白斗り 金栗

秋さびや五徳口の口角了 錦糸

作水のゆり田門の誇りど香 一秀

美向きの白きたん経佳久利 文和

月進の表徳とほふ陽向の義 錦糸

蕙おの谷や小川の掬時雨 木卯

経よかけを隔むも橋のほぐ雲 泉齋

立田の板メあぐふか汁のよ 叶

清路やをかりがきる秋原凡 岩郎

秋候よ何うせそと去く蕙武が状 祖山

聖没の田子又藤原者の又二うり 錦重

様久ハあさん學化でそい伝は 全

堪忍の目打ハ堅ひ男一木 竜舎

玉味やと上げるおき路の山せん 梅鳥

菅原の配不義海で月の宴
 山田とゆ〜ん山秘蔵の根、ま
 ちのあゝ田町の家根へ歯後下
 傍りり結の連基を綴り中田南
 本ちりの神風のゆ〜り 是
 伊豆岩の火とゆ〜りゆん大つ〜
 後波根の月お子板ハゆ〜りま橋
 かとがん山ハ糸おんの後口ゆ〜
 籠て〜あま珊瑚の玉もまる氣あり

錦糸
 醜郎
 赤子
 乙テ
 竜舎
 全
 扇松
 竜舎
 赤子

鬼女の面をお唄イのゆる〜り
 佐理のち子ま井くら〜り文字
 あ〜〜山姥をキツ坂田連
 山ま〜りゆ〜りぬ松一ト 本
 僧人ま〜り抱〜り浄心三日の月
 るる子舟の廷厨橋井ゆ〜り多門
 柔ま〜りの石鴉琴ゆ〜り赤柳子
 うぬ舟りあまゆ〜りア後家ハ松イ
 人知〜りぬ邪摩子温石の物名がま〜

株木
 泉射
 三朝
 金奥
 赤子
 株木
 一秀
 祖山
 山

榮山花とめのウチは雲の美麻の秋 木卯
けうとれきぐん風も水とまて 嵐六
子の澄よけはほろよのまき石 乙テ
あひどけ天宮のむん山をく 栄川
雅とて丸頼よ本陣の八日月 木卯
西の望日彦葉山をけ能く子 株木
蓋つる虎もちけづりの月光中 木卯
山鳩のあよ白きぬらんがーさ 梅鳥
は山なるおよとらの勝重ー 錦重

ゆらぐともりやね下の大神の物 竜舎
やんまも山も存てる袋ーをま 錦重

叶評

摩のあふ下石のろと人の波 竹子
山とく本原の海へ御産後 扇松
山とく長雄儀美の敵味方 錦糸
名笛の若律楚軍も秋のそ 楓枝
城跡のあふりもあまの月と星 錦重
月光と夜軍用よ田村丸 山太郎

苗子居の定尉橋井(うぶま門) 株木
橋の舟も来ふ秋がけの燈の灯 竜舎
舟子生の橋海へ身をたなへし 巨眼
善を積む山の子孫の抱ひ所 楓枝
一襟かたむけ我が身も舟よそへ して
八景の舟へはるる百足山 木卯
舟の目めを友川が丁(り) 全
丸の舟の秋葉も枝をとる 柳町
堅い笑ひつて暮らふと白嵐 三朝

山の上の蓋よくくも巴 むき 錦糸
毛推する馬のまきうま 麒麟の火 竜舎
勝山の根くまきあせる巻のごま 木卯
舟の備えまの舟のうら 麴丸
山くま我が舟よは 錦糸
石橋の巻谷うら切をこくうら 嵐六
ひらく形り女胡蝶のま 鶯童
せんまの画の縮まのま 竹葉
ゆはくまらうと陸子(山) 木卯

あつらんよき肉月のふりしほりき 自慢
つゆのそぬき石田はれよ実い 錦重
鴨糞煮下戸のあつそふぬ世用 木卯
川まきの月ハうぬほれ後あり 安郎
新去の鼻をーがゆるま 田山 柳町
深くよあぬ妻治川のこゑと口 株木
月のうげくやと坂のそぞと豆腐 三朝
西衣のめで降子をとおきの運を 錦糸
あつそふく徳と神のあつぬ 祖山

梅が葉はれぬ山休所の縄つる 木卯
えぼをのれれぬこころよ抱く石 自慢
草のま実がふらとへのゆきのきり来る 株木
おもしろうまづくはまやの意は事 江山
よふむんのころあつちる所は事 錦糸
梅つけく月うら大のあつ石天窓 錦糸
紙中をとま山よとるをうら者 扇六

錦重評 (三井の晩鐘 唐崎の夜雨)

きのつよとせむるをきき井の鞠の股 木卯

去るよあつても毎一湖橋の人か
 祖山 叶
 此れ後守るまふ知れど産の海抜
 祖山
 籠井巻州よお子板 巻 叶
 葉木
 藤子の前で伊侍の又大カ
 葉木
 双も雨さくくもさくや書と後
 葉木
 雨のりのをヨルゴルの洞あふん
 祖山
 そこか大名あふんあふで袖ヶ後
 三箱
 晴雨の傘へ大文字で五條坂
 野萩
 後橋の角形鬼もく付て下り
 鳥水

三合目著一々照のるともあり 眞似言
 度濃子の帯ハ自力よとりか板 文和
 きこひ兜草巻の十雅市系跡 松丸
 之紙豆腐へ切落のあがらじ 祖山
 一朱さけあを書て系武米の兜 木卯
 霸王樹くつり牙で紙へ系大井川 醜郎
 多怪系尻尾のさく系板 机 錦糸
 約り後任瓦屋、控る系も仕と男 又丸
 年始のけし餅 系内と後之牙 竹賀

紀尾井坂おく病者ハ旦リ 乃 花山
惣字傍一割淨を及成寺 錦糸
女三老妻を及く飛白橋大江 株木
三日坊を及く大伴を及く又島子 祖山
唯受ハ柔印くくく津所云イ 赤子
美あ良のそんを及くうたうたを及く 野萩

柳泉評

聖人よ及唐冠又かある 柳
イサは伊賀ニ是が所取の流のそカ 扇松

孝人の猶ふ初公やり 醫者の聖 全
数万ふりしる三粒の輪の 恩 泉射
三韓の俗陣あ如くぬきと 柳を 檀義
惣今のの殺るは推く 浄の中 木卯
可彼又似く急息地を及くのそと云 松丸
守隨く急申三浦 五のそひ者 龜舎
均浄くお入大さか形りて 三箱
信都るどおるの橋場を及く 巨眼
まゝくむのむふ女三の所を及く 麴丸

湯より入るる女慶長島の場合あり
そくぐもつらく暮る雨 随
乱し湯をすむるおとせの路は
きん吹草をの丁雅市原我
雨阿しれと暮るる鬼の豆
婆アハ惟がかくさんごよと唐夫人
てきん物あり唐茶子好きでラス
臼井おめで吾妻橋をさぐらう
花と席思案の結ぶらがるし

木卯
柳町
祖山
松丸
江山
叶
手枕
巨眼
メ丸

三人も又くそふ腐きツ木
早の井とく南セハチと大だひ
初鳥毎日の園のゆふやう
帰るはゆつたがぬいしこむと
之物夏加柳湯の肉厚風
年か々のかげ南組の屋敷とる
井と改き坊ハア子とおびと
夜おの舞もゆるそそオハ
風廟ハ三木のきんくもるけ

泉鯉
自慢
岩郎
メ丸
扇松
柳町
志計
叶
巨眼

早津よあるとんねバ様ぐら
巨尾も後らよあると雨と古し
庭あさうらふ唐人のまゆひ
仙人ウイヤ唐人ウイヤ家々
ハツクサメト女天井ハ鼻ッ尿
白鼻をかじやうよかむる紐の後
弾丸と搦丸とよむハツ目の子
美尻の切尻さうぶ賣しやう
お徳でもおどろそこまア大の原

花山
柳町
メ丸
文和
祖山
木卯
松丸
メ丸
祖山

大尾
三分の赤貫わらで縁の中
昭君の傍ハお徳の一枚繪
雨もりのちやラブルの潮あふ
云々来て深又の吟ちやくと入
お徳も云ツゲツも解し新さ
まの傍の後ハ知年の華陽道
桶あふ云々様坊の心抱をメ
毒の何分唐鍔隊を玉藻銃所
馬あふ三日ア々るの様草

乙テ
嵐六
祖山
手枕
叔茂
醜郎
祖山
竜舎
醜郎

こびさるる月の納たに赤い判 真誓
下りたのわしをばあおきよま 木卯
花かお發のまやあひよも花子 帆布
大毎日根なるわろそり用子多 柳町
まろしモウ根なるハ糸の足湯ぢや 自慢

佃評

持るごよせび汁傍を即細伐 巨眼
持子期よ終るハ殉死の義をとり 叶
破が井まごふ足びのよの日本武 自慢

樂の境の素懐唐韻ぢよま 巨眼
唐人近ひ顔もあるあごめし 柳町
えくくくくくもあぬ建唐役 兵庫
田がえなる実なるぢよま陣 巽
つふくくくく口ハ津波の通る湯 江山
つふ除入りの通口もかぬがまき 赤子
大坂の例傍天條の川よ山 鞠丸
お清りエツゲツも解一かぬ日 扱茂
三日月の漢を研るん砥並山 巨眼

湯起侍の女で藤津寄る心切
蓮葉を折て近く都の丈井川
崖のそとに持ぬきもぬえり
るよ花の露も杖く膝をとめて
女扇でるきたる所忌の後
年路の生解平内と繕はる
海ろくとなくハ伊豆の船三井の港
山を身ふるはハ伊吹の雨も晴れ
藤の雨初よるまんがたれぬ

叔茂
巨眼
祖山
泉射
自慢
竹賀
尖郎
鞠丸
巨眼

云河路くかいつと持も内でお
小夜ぬけと都を瓜屋も猫の妻
つうかぬ海を走持るも志と男
袋牛扇の突か唇祝祝歯
漆木ハ又電去で女をこが
節分のは豆一トるうて色り
月の清まぐとあたりきれぬ
三猿園で入るる猿の籠
けり藤漢汝あるのはくまの

手枕
江山
メ丸
鳥水
竹賀
柳町
錦糸
江山
如扇

雨やあつれもあつれも鬼の豆 江山
 湯は極さぬさうく机は敷きまのむき 叶
 あつれのある三日宝の持ぶさうれ 巽
 立てつかげれ唐人と青き巻 巨眼
 夜舟のつらきく客をとり伏え丁 竹賀
 天危のきりえんせ五多むむあつれ 九
 片らむくい子^{テビ}をさきま^{テビ}の子 扇歌
 二人り押込三人ハ外一の巻 海月
 陰夜の屋いきんでる内まよぬり 巨眼

五月十二日 小麻三會目

忠臣蔵一歌

寿山評

僅三三箱

御柳乃ハ礼羊士の獲へ落 栄川
 阿そそ来て阿そそ骨とやてんせ 龜友
 御日席落れり只魚と歌 三箱
 師重り証念込込の彩古今 新昌
 切先の血し不忠義の獲へし 通古
 いささ独り四十七羽の明ヶ鳥 和用

横田リーモニも十坂うあうりセモ
 井筒
 事所して兄れを河の松かゝい枝
 和国
 退出後吉良う玄園子弁科の字
 木野
 かゝい命を惜み終く捨る武士
 和国
 手打蕎麦うもん花の咲下地あり
 通古
 侵曇花う咲と夕のちるは十七
 山芋
 梶川う母くんを美士の名ハ之尺
 三箱
 ぶッ重くな心下曲々竹の智恵
 山芋
 長羽蹴そへん〜と運老小化ケ
 竹賀

光隆の七段目も約燈籠
 三朝
 ついでに河をさると巻る河さむさ
 三箱
 夜討乃か咄し平を奪う久歩行
 竹賀
 竹茂の是科武士たたく港へ
 通古
 平を奪う水難飲の地をやく
 ト丸
 か成川人ま希さんう身を投る
 田舎
 九をう花モレ百錢う有るから
 いさ大
 鉄炮場吸付てセス口業
 三箱
 炭砂をてちるな小便四位ハ岳
 通古

大尾
山科の養老 獲を獲りて出 トシ丸

三朝評

城合のり由良ハ右文七公 養老 和国

也免て由養老 獲を獲ると地 養老 トシ丸

忠長を 採子 ます。こヶ 所 鳥友

もくも 獲り 采。夜の 採 篠の 養 竹賀

又ハ 獲り 忠長ハ 采。こヶ 所 和国

市の 獲り 忠長ハ 采。こヶ 所 井筒

子乃 獲り 忠長ハ 采。こヶ 所 新富

袖の花乃 養老 獲を獲りて出 トシ丸

半弓を 採りて 射ち ます。夫田 矢次 井筒

采士子 採りて 射ち ます。夫田 矢次 麓

采士子 採りて 射ち ます。夫田 矢次 近遊

采士子 採りて 射ち ます。夫田 矢次 麓

采士子 採りて 射ち ます。夫田 矢次 今

采士子 採りて 射ち ます。夫田 矢次 トシ丸

采士子 採りて 射ち ます。夫田 矢次 ヤナキ

竹賀評

和の舎替も鳥氷を碑へ向 通古

茶の器も元と斗子人たる也 井筒

袖の花の葉奢に蓋の鬼針 木甲

高面は血子條の緋子炭子條 通雅

せうたのないうとさく人角氣獅子 三箱

炭を攻、功を乞うる石 死り 木甲

井て湯を吞一勺出奉た己へ 麓

香炉子坊々和歌の煙草壺 通雅

ちりちりもよく漢字もな漢士の獲 三箱

九太の花も七百錢の角心 麓

加津川人立ちいさ人角心 田舎

銀あがもいそ九を文子どのに 麓

今ち葉のハか部へおてちくつて 子太

寺屋ハそくち打りくさくたさけ 和国

兼好も漢くおつたと思へとも 卜丸

川柳評

四百余り比まらぬをき、四十七 木甲

掘田子も七も十坂うたうとせを 井筒

岳動てハ吉良キ子遊て不マクセ 独歩

只内差券の少乃乃兼に喰凡 麓

空際の夜具扁鶴も初らぬ豚 全

漸階下の櫛子ハ似虫短魚人 全

鳴る月乃乃擗懐早う出て暗し 卜シ丸

先非六ん守筆さと吉良の毒隣 山芋

舌の呪眉子兼をく兼士一強 麓

切獲くとあつをかきもあめて存 通古

ちつともくく守るる兼士の獲 三箱

そつした吉良妻をつしくゆを解 竹賀

兼士強イ其士をほせり泉岳寺 通雅

戒名乃乃級と成るときた入上ケ 通古

若々も忠兼ハ二十こ多し 近遊

兼士子振舞ふ兼と弓を強 全

魁攻謙倉乃乃ハ帳座 ヤナキ

あまくさく一ト腰も世ハ巻の級 トシ丸

併一家の親とよあを炭俵 田舎

いろは乃切絶カケヤ振かき世 和国

音子増し初叙のたを赤賣 通雅

赤賣懐哉卷三日の月乃竹 麓

音子路を坂を有って秋に至り 今

赤賣と美士かきそく獲を切 木而

市の噂り子中不へ登り 井筒

松を切山吹を出一梅と絶 独歩

吉田へ侍内房へ通ふ梅の尻 竹賀

平を穿つ水難飲乃死を後 トシ丸

三人乃傘抄市乃五十返 今

光陰乃五陰目千々鉄炮場 三朝

射の仇付ッハ芝のかあろら 山

振り上るとなせり心 辰く 懐 栄川

ヒツ呵る茶子打 昏 止 三箱

茶師寺と云へと毒く 男 麓

長羽織を穿りく 医者よ代々 竹賀

五男秘後衣の術 平右衛門 田舎

釣殺しむろく切老今のえん 松下

風子吹れて赤くハナア 女雙 麓

おちの人と志や初と之と如る位
大尾 薦僧より此等用と云ふ来り門
竹賀 松下

おちの人と志や初と之と如る位
大尾 薦僧より此等用と云ふ来り門
竹賀 松下

吉澤



吉澤
吉澤

